



0% 100%

ニュース

『結婚の観』はどこにあるの？タロットの神様があなたを恋愛診断

タロットの神様 Loveの結婚Mail便

トップ | トピックス | ジャーナル | 速報 | 社会 | スポーツ | ショウビズ | 政治 | 経済 | サイエンス | 国際 | 業界レポート (PR)

年収700万円の求人満載
カウトで年収UPを狙う

MSN ジャーナル

なぜ出ない？選挙をシミュレートするゲーム

ニュース検索

すべてのカテゴリ

業界レポート (PR)
(提供 インテリジェンス)



最新ニュース

- 欧州の探査機、火星上空からカラー画像撮影・公開
- 昨年中国成長率 9.1% = 10~12月期は9.9%
- 独に世界最大の太陽光発電所
- U-2 3 候補合宿初日

経済情報

日経平均 11,121.29 ↑

NYダウ 10,600.51 ↑

米ドル 107.35

東証1部 ↑ 949

騰落数 ↓ 400

東証1部

値下率ランキング エコナック

吉岡美穂 e-check!

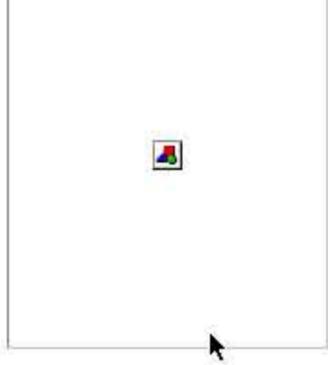
アデランスの新年の誓い 皆様の髪の健康が一番!

突然の病気やケガにも 入院日額10,000円保障

【アリコの医療保険】 みんな考え始めてる！ 今こそ賢い保険選び！

ニュースセレクト

子供が子供を殺す(3) わが子だけは大丈夫、か？



今回のシリーズ(1) (2)では、子供による犯罪事例を挙げ、専門家といわれる人々の意見を紹介してきたが、最も気になるのは、どうすればこうした犯罪を防ぐことができるか、どうすれば自分の子供を犯罪者にせずに済むか、である。自分の子供が罪を犯すなどと考えている親はいないであろう。以前紹介した事例の親達にとっても青天の霹靂(へきれき)であったに違いない。まず、各種テストからはじき出された傾向を紹介したい。(吉田朱見：1月20日)

LAO (Legislative Analyst's Office) が行った調べによると、繰り返し罪を犯す少年はごく一部で、ほとんどのケースが1、2回の犯罪歴にとどまっている。逮捕され、保護者から叱咤され、一夜留置所に泊められる。ほとんどの少年はこの経験で、2度と罪を犯してはいけないということが身にしみてわかるわけである。ただ、最初に罪を犯した年齢が若ければ若いほど、犯罪を繰り返すようになる確率が高くなるという統計もある。罪を犯す、または犯すようになる少年は次のような要因が考えられるとLAOは述べている。

まず、成績が悪い、出席率が思わしくない、中退するなど、学校にまつわる問題。学校を辞めるのが早ければ早いほど、対人関係など団体・社会的行動能力を養うチャンスが少なくなるためである。次に挙げられるのが、家庭内の問題。家族の一員が犯罪に関与しているケースはいうまでもないが、その他に、両親による虐待や放置、さらに両親の監視が行き届かないことなどもこれに含まれる。

第3に、飲酒や麻薬などの使用。これらの常用は、子供の抑制力を低下させるため、犯罪への道に陥りやすくさせる。アメリカでは高額な麻薬を手に入れるため、窃盗・売春などの罪を犯す事例が多く報告されている。

そして次に挙げられるのが、盗みや家出などを繰り返すパターン。内面にある幼い攻撃的性格を思春期初期に克服できない子供に多いといわれる。

最後に、不良仲間などとの付き合い。年齢が幼ければ幼いほど、悪い道に入り込みやすい。こうした要因があるからといって、必ずしも子供が犯罪に走るというわけではないが、これらの要因を多く持ち合わせるほど、犯罪者となり得る確率が高いとされる。

テレビの影響

「今日の社会は、子供を人殺しに育てあげるためにトレーニングを繰り返しているようなものだ」、といわれて、ソクリとしない人はいないだろう。「(戦場で)殺し」ができる兵士を育てるトレーニングを専門とする、軍部心理学者グロスマン氏の言葉である。子供が犯罪に走るのは、拳銃の蔓延や貧困、虐待など様々な要因があるが、多くの社会で共通した、そして新しい要因はメディアによる、暴行暴力シーンの垂れ流しだと主張する。25年という年月を、陸軍心理学者として「どうしたら人が殺せる人間を育てられるか」という課題を研究に費やしてきたグロスマン氏は、「人を殺す、つまり同種を殺す能力は人間に自然に備わっているものではない。(文字の読み方を習うのと同じように)殺すことを習わなければ、備わらない能力である」と語っている。彼らが兵士に人殺しを教えたように、テレビや映画は子供達に人殺しを教えているのだといっているのである。

アメリカのナショナルネットワークテレビCBSのある役員の逸話だが、彼は彼自身が勤める業界が暴力的行動を子供たちに促す、と考えており、彼の家では子供が文字を読めるようになるまでは自由にテレビを見せないと決め、子供が見る番組は彼自身が慎重に選んでいるという。さらに子供のデイケアセンターはテレビがなく、子供向けのビデオのみを見せるところを選んだ・・・という。

ピッツバーグ大学は、35年間に及んだリサーチにおいて、メディアによる暴力的シーンは子供の攻撃的行動を引き起こす要因になると発表している。心理学者エロン氏は、8歳の子供達の行動と見ているテレビによる影響を関係づける研究を、1960年代半ばから約30年に渡って行った。その結果、暴力シーンの多い映像は子供達の攻撃的行動を引き起こすのみならず、大人になってもそうした性格を引き続き持っている述べている。8歳の時に暴力シーンの多いテレビを見ていた子供を、18歳の時点で調査した結果、子供の時のテレビの影響と思われる攻撃的行動が見られ、さらに30歳の時点で同人物等を調査した時も同じような行動パターンが見られたという。

ペンシルバニア州立大学保育部では、子供達を3つのグループにわけ、第1のグループには"バットマン" "スーパーマン"のアニメ、第2グループには"ミスター・ロジャース・ネーバーフット" (子供向けの教育番組)、第3グループには暴力シーンも教育関連も含まないアニメを見せ、その後の子供達の行動を研究した。その結果、第1グループは遊びの時も他の子供達よりも能動的かつ攻撃的、おもちゃを壊すなどの行動が見られ、反面第2のグループは、遊びにも繊細さが感じられ、教師を手伝ったり、他の子供達を気づかうなどの行動が見られたと発表している。

また、ドナーステイン氏とベンロッド氏は著書 (Review of Personality and Social Psychology) で、5日間にわたって性的暴行を含む暴力的シーンを多く含む映像を見せられた男性は、初日から日がたつにつれてそういった映像をさらに楽しむようになり、女性を侮蔑視するようになる。最終日には、レイプはそれほど重い犯罪ではないという考えを持つようになったという研究結果を発表している。

現在では、アメリカン・メディカル・アソシエーション、アメリカン・サイコロジカル・アソシエーション、アメリカン・アカデミー・オブ・ペディアトリックスなどの団体も、メディアは暴力的シーン放送を抑えるべきとの声を高めている。

音楽とミュージックビデオによる影響

約50年ほど前にロックが初めて世に出てから、音楽の歌詞は急速に変ってきたといっよいだろう。現在、ティーンエイジャーに人気のある多く音楽の歌詞には、セックス、麻薬、暴力、またはそれらを連想させるような言葉が多く入っている。AAP (アメリカン・アカデミー・オブ・ペディアトリックス) は、こうした歌詞は若者に反健康的なメッセージを送っていると主張する。同団体におけるリサーチでは、14歳から16歳の子供が音楽を聞いている時間は週平均約40時間となっているが、ロックなどの音楽が子供達の攻撃的行動を引き起こしているとの研究結果はまだない。それならロックミュージックなどは無害ではないか、と思いたくなるが、そう単純ではないようだ。同団体は、ロックなどを聞く若者の約70%が、音楽のみを好みその歌詞自体は聞いていないというリサーチ結果を得ており、それゆえ彼等に有害と思われる言葉や文章がさほど若者達に影響を及ぼしていないと判断している。つまり、有害因子を含んだ歌詞も好んで音楽を聞いている子供達には充分悪影響を及ぼし得るというのである。よって、親は子供が聞いている音楽にも注意を払うべきとの警告を発している。現に、ヘビーメタルは疎外感や麻薬・飲酒への誘惑、心身症、自殺への誘惑などを誘発する要因を含むと充分に考えられると、多くの研究者達が判断している。

ミュージックビデオは新しいタイプのアートとして社会に受け入れられてきた。だが、中にはセックスや暴力、麻薬、自殺などを連想させる映像を多く含むものもある。若者達がたとえ音楽の歌詞をそれほど重要視していなくても、これらのビデオを見た後で同じ音楽を聞けば、当然その映像はフラッシュバックとして出現するわけである。アメリカのケーブルテレビには音楽専門のチャンネルがあり、アメリカ全体で約70%の家庭がこのケーブルをつけているから、ほとんどのティーンエイジャーがこうした音楽番組を自由に見られる状況にある。AAPのリサーチでは彼らがこうした音楽番組を見る時間は1日30分から2時間となっており、これら番組の75%がセックス関連を含み、半分以上が暴力的シーンを含んでいるという統計が出ている。こうしたシーンを含むミュージックビデオは視聴者を攻撃的行動に走らせ、若者を安易なセックスに走らせる要因となり得るともいわれている。ある機関(ある空間に人を軟禁し、行動の自由を制限するというリハビリを行う機関)が行った実験では、この音楽番組視聴を禁止することで、攻撃的行動が減少したとの実験結果も発表されている。

交通の発達で子供達の行動範囲は広がり、コンピューターによる情報の氾濫で有害とも思われる多く要因に子供達はさらされている。ポルノまがいの雑誌がコンビニに並び、テレビできわどい宣伝が流れる中、子供の行動に逐次目を光らせるのは昔ほど容易ではなくなった。なぜ、日本の政府はこうしたところに規制を作らないのかと疑問に思うことも多々ある。

当たり前のことだが、子育てには方程式のような答えはない。ただ、マイナスな要因が増えれば、犯罪への道の確率が高くなることは自然のことだろう。しかし、暴力的と調査結果が発表したスーパーマンやバットマンは今でもアメリカのヒーローであるし、ロックミュージックなしの音楽は考えられない。それらを全面的に否定することはできない。だから大切なのは"バランス"かもしれない。

アメリカでは1987年に法律ができて以来、子供達に不適切と思われるテレビ映画には"Viewer Discretion Advised (視聴者の判断が必要)"との警告が付くようになった。日本でもあるが、まだ少ないようである。だから、テレビやゲームをベビーシッターの代りにしない。コンピューターは15歳を過ぎるまで、子供の個室におかず、家族が集まる部屋におく。インターネットへのアクセスには制限を付ける。大半の方は既に実行していると思うが、まだならこんなところから始めてみるのもいいのではないだろうか。